

特集

緑内障点眼薬の基礎と臨床

序 論

富田剛司*

今月号の特集は、「緑内障点眼薬の基礎と臨床」である。眼科で使用される点眼薬は多いが、なかでも種類の多さでは緑内障がトップなのではないか。突き詰めれば、緑内障の診療がいかにかうまくいっていないかという証拠のようではないかと、自虐的に思えてしまう。

現在わが国で使用されている緑内障点眼薬は、1981年にチモロールマレイン酸塩。その後、カルテオロール塩酸塩、ジピペフリン、そして β_1 の選択的遮断薬であるバタキシロール塩酸塩が使用されるようになった。1994年になって、現在はイオンチャンネル開口薬とされているイソプロピルウノプロストンが当時は日本で開発された世界で初めてのプロスタグランジン（以下、PG）関連薬ということで注目された。1999年になって、ラタノプロストと炭酸脱水酵素阻害薬の点眼薬であるドルゾラミド塩酸塩が相次いで登場した。1999年以降、1回点眼の β 遮断薬も多数市場に出てきている。2001年には、 α_1 ブロッカーであるブナゾシン塩酸塩。2002年にはドルゾラミドと同じ炭酸脱水酵素阻害薬である、プリンゾラミドが使用開始されている。2007年に入り、ラタノプロストに続くPG関連薬としてトラボプロスト、タフルプロスト、ビマトプロストが相次いで使用開始されている。さらに、ラタノプロスト/チモロール配合剤、トラボプロスト/チモロール配合

剤、タフルプロスト/チモロール配合剤、といった、PG関連薬と β 遮断薬との配合剤点眼薬、ならびに、ドルゾラミド/チモロール配合剤、プリンゾラミド/チモロール配合剤といった、 β 遮断薬と炭酸脱水酵素阻害薬との配合剤点眼薬がわが国でも使用可能となり、現在多数使用されている。また、海外では永らく使用されていた α_2 作動薬点眼薬のプリモニジン（アイファガン®）がわが国でも4年前から使用可能となり、2014年末には日本で開発された主経路に作用するROCK阻害薬点眼薬、リパスジル塩酸塩が世界に先駆けてわが国で販売開始された。ごく最近ではドルゾラミド/チモロール配合剤の防腐剤非含有1回使い切り製剤が販売開始され、以上を合わせると、29種類となる。ジェネリック製品も多数あるため、緑内障点眼治療薬はどれを使用するか選択に迷うほどの状況となっている。

このような状態のもと、一度現在の緑内障点眼薬の現況をまとめてみる必要があるとの考えから今回の特集が組まれたと理解している。著者は、僭越ながら私自身も含め、長年緑内障診療および点眼薬の基礎・臨床研究に携わってきた第一人者の方々ばかりである。眼科医は外科医ではあるが、こと緑内障治療に関してはお薬のプロでもあるべきと考える。その意味で非常に参考になる特集であると自負している。

*Goji TOMITA 東邦大学医療センター大橋病院眼科